

記念講演

## エズラ・ヴォーゲル博士の回想

—アジア研究の継承と発展—

クリスティーナ・デイビス (Christina Davis)

ハーバード大学日米関係プログラム所長、政治学部教授、ICCS 顧問

【\*本稿は、2023年7月1日に愛知大学で開催された「第1回エズラ・ヴォーゲル記念フォーラム：アジア研究の過去・現在・未来」（ICCS主催、中日新聞社・ハーバード大学日米関係プログラム・ハーバード大学アジアセンター共催）におけるクリスティーナ・デイビス教授の記念講演（原文は英語）の日本語訳である。】



本日は第1回エズラ・ヴォーゲル記念フォーラムの記念講演にお招きいただきまして誠にありがとうございます。この愛知大学で皆さまにお会いすることができて大変光栄に思います。私はハーバード大学政治学部の教授として、またハーバード大学日米関係プログラムの所長としてここに来ているわけですが、それより何よりもまずエズラ・ヴォーゲル (Ezra F. Vogel、中国名：傅高義) 先生の教え子の一人としてここに来ているつもりです。大学時代、ヴォーゲル先生の講義を受けることができたのはとても幸運なことでした。1993年に国連における日本の外交政策について卒業論文を書いていたとき、私は東アジアを研究する学生たちとともにヴォーゲル先生のご自宅のリビングルームに集まってピザをかじりながらアドバイスを受けたり、自分たちの研究について話し合ったりしました。ヴォー

ゲル先生は私たち全員をご自宅に招待してくださったうえに学生一人一人の話を喜んで聞いてくれたのです。

卒業後、私はハーバード大学の大学院生としてヴォーゲル先生が担当する講義科目「東アジアの工業化」(Industrial East Asia)の講師( Teaching Fellow)として教壇に立ちました。その後、私が教授としてハーバード大学に戻ってきた際にも、ヴォーゲル先生はとても親切に私を迎え入れてくれたうえに、ハーバード大学日米関係プログラムについてアドバイスをしてくださいました。ヴォーゲル先生はハーバード大学日米関係プログラムの初代の所長でもありました。私はスーザン・ファー(Susan J. Pharr)先生に次ぐ3代目の所長ですが、ヴォーゲル先生の事業を継承していくことをこのうえない名誉だと思っております。

### 学者、教育者、外交官として

今日はヴォーゲル先生についてお話ししたいと思います。ヴォーゲル先生は、皆さんご存じの通り、本当に偉大な学者であり、人物でもあります。ヴォーゲル先生のように寛大で才気あふれる学者の素晴らしい点は、ご自身がこの世を去った今現在においても、ご著書を通して、あるいはその教え子たちを通して、そして公共知識人としての先生の講義を通して、私たちと共に生きつづけているということです。

私は、まずヴォーゲル先生の講義や研究活動を取り上げ、さらにそれらと現在の私たちが生きている世界とのつながりについてお話ししていきたいと思っております。ヴォーゲル先生の学問がいかんしてアメリカとアジアの架け橋となったのか、その教育者としての役割や外交官的な役割についてお話しします。私は政治学における国際関係の研究者であり、大学院生時代に先生の講義科目「東アジアの工業化」の講師を務めていましたので、そうした経験も踏まえながらお話ししていきたいと思っております。

私たちは先生の研究がどのようなものなのかを知っています。ヴォーゲル先生のご著書を読んだことがある方も多いでしょう。しかし、もし読んでいないという方がいらしたら、ぜひとも読むべきです。私はヴォーゲル先生の多くのご著書や論文のすべてについて触れることはできませんが、ヴォーゲル先生が日本や東アジアの重要性を世界に紹介するうえで、彼ら異なる社会の人々がどのようにして平等と秩序をそなえた中産階級社会を実現したのかということをも明らかにしたのは、特筆すべきことなのだと強調しておきたいと思っております。

### 『ジャパン・アズ・ナンバーワン』

世界各国、各地域の価値観は異なっているものの、多くのことが共有されているというイメージについて、ヴォーゲル先生は共通の価値観だけではなく、その相違点を紹介し、さらに理解し合う手助けをしてくださいました。

『ジャパン・アズ・ナンバーワン』(Japan as Number One、1979年)は、日本を分析することを通してアメリカ自体を研究しようとするものです。日本がどのようにしてアメリ

カとはまったく異なる低い犯罪率、忠実な従業員を擁する成功した企業、汚職の少ない政府を実現させ、さらに維持してきたのかを分析しました。くわえてシンガポール、香港、台湾、韓国という「アジア四小龍」の成功と社会を組織するさまざまな方法をもうひとつの取り組みとして分析しました。ヴォーゲル先生は東アジアの実像をもっと知らなければならない人々に紹介しただけでなく、当時直面していた問題に立ち向かう方法として歴史を見ることを提唱したのです。

『現代中国の父 鄧小平』 (*Deng Xiaoping and the Transformation of China*, 2011年) は、中国がどのようにして改革に取り組み、共産主義社会として市場経済を受け入れ、数十年にわたる孤立を経て世界に目を向けたのかを顧みるものです。さらにヴォーゲル先生は、この鄧小平研究によって中国自身が自らの足跡を顧みることができると考えておられました。

そして、ヴォーゲル先生の最後のご著書『日中関係史：1500年の交流から読むアジアの未来』 (*China and Japan: Facing History*, 2019年) (以下、『日中関係史』) は日中関係の改善を促そうとするものです。歴史を振り返ってみれば、両国はそれぞれ社会の秩序や都市の作り方、産業構造や産業政策のあり方について貴重な経験を積んできましたが、日本が中国から学んだり、中国が日本から学んだりした交流の時期こそが、それぞれの国をより発展させることについて有益であったと捉えています。このご著書でヴォーゲル先生は、歴史の教訓に基づいて、日本と中国は疎遠になるのではなく、互いが学び合える時代を再び出現させるべきなのだということを説かれました。

また、ヴォーゲル先生は学際的な研究を支持しておられました。ヴォーゲル先生はもともと社会学者として訓練を受けたのですが、シャーロット・アイケルズ氏 (Charlotte Ikels、ヴォーゲル夫人) がおっしゃったように、人々を真に理解するためのフィールド調査では人類学的なアプローチも行っておられました。政治学を専門とする研究者である私から見ると、ヴォーゲル先生は社会や国際関係を研究する際、制度や権力の構造に対して驚異的な洞察力をお持ちになっておられたと思います。また、さまざまな国を研究対象とする研究者として驚くべき幅広さも持ち合わせておられました。

ヴォーゲル先生がとりわけ優れておられたのは、日本や韓国、台湾、中国に関するご自身の深い経験を比較研究に活かされておられたことです。それによって今日の学生や研究者が追従せざるをえない研究上の金字塔を打ち立てられました。

### エズラ・ヴォーゲルの講義「東アジアの工業化」

ハーバード大学でのヴォーゲル先生の講義「東アジアの工業化 (Industrial East Asia)」はコア・カリキュラムの一つでした。それは「外国文化 26 東アジアの工業化」と呼ばれるもので、日本はどのようにして成功したのか、また台湾、香港、韓国はどのように成功したのかを明らかにし、さらに中国についても触れるものでした。この講義は1990年代に始まり、2000年にヴォーゲル先生が退職されるまで開講されていました。つまり1990年代という重要な10年間、「東アジアの奇跡」に目を向けていたわけです。ここでヴォーゲル

ル先生はハーバード大学の学生たちに、社会や経済制度がどのように組織されているのか、そのモデルはどのようなものであるかを考えるようにと教えられておられました。

この講義でヴォーゲル先生は、東アジア各国、各地域に見られる目標を設定した政府の介入、企業間協力の促進、再分配の社会モデル、組合間の核心的な交渉、さまざまな方法で代表権を認める民主主義へのアプローチなどの事例によって、純粋な市場原理に基づかないというアメリカとの相違点を明らかにされておられました。ヴォーゲル先生は常に他の社会を観察することに関心を抱かれておられ、さらにそうした慣行がどのように普及していったのかについても講義で取り上げられておられました。つまり、日本がどのように成功したのかということだけではなく、日本型モデル、5 年計画、少額だが特殊産業への民間投資の促進に役立った関連省庁の創業助成金(seed grants)などのモデルがどのように他の国や地域に普及していたのかについて考察されておられたのです。このような実践と普及、さらにその変化に注目するとき、東アジアを一つのモデルとして見ることはできません。各国、各地域での適応のありさまに十分注意する必要があります、それは今日においても重要なことです。

そうした講義を展開されたヴォーゲル先生が教育者として偉大であられたのは、理論を検証する方法として物語を語る能力でした。周縁の国には発展するチャンスがないとか、市場は効率的であるから市場ベースのモデルだけが成長をもたらすのだという理論に対して、先生は日本やその他の国や地域に生じた異なる事例を示すことで挑戦されたのです。

### ハーバード大学での講義資料

## Teacher Lessons on Learning: Iwakura Mission

Foreign Cultures 26 Industrial East Asia  
Lecture Outline for Sept. 24, 1997  
Lecture Title: The Iwakura Mission & Developmental Strategies (1868-1931)

① Distinct. could single initiative } Excitement, wonder, amazement  
② Were welcome }  
③ by 20c }  
} feel important }  
} President like }  
} real person }  
} carpets }

Issue: How Japan acquired an economic strategy and how it evolved

1. The Iwakura Mission (Dec. 1871 to Sept. 1873)  
National study tour led by high officials in every area } milit' educ'n  
Very detailed planning to visit leading centers  
The trip itself: 9 cities in US, 8 European countries, Suez Canal  
Vietnam, Hong Kong, Canton, Shanghai  
Museums, cultural events, schools, factories, military

2. The lessons of the Iwakura Mission: (formulated in Kume's 5 vol. diary, 1878, and Views On Industry, 1884)  
Enlightenment: overall cultural level, values, 文明開国 - civilization  
Mercantilism: get favorable balance of trade, accumulate capital, get strong overall economy }  
Idea of expanding economy, strengthening country }  
Importance of planning, organization, priorities, statistics }  
Critical role of technology, but also strengthen ag, mining }  
Develop physical infrastructure and industry by stages }  
Use thrift to create savings, invest in industry }  
Develop new economic strategies }

Culture: Broadway, Strauss, Vienna, Mission, As America  
Collect, bulletin, get colonies

ヴォーゲル先生が担当された「外国文化 26 東アジアの工業化」の講義資料を皆さんにご覧いただきたいと思います。私のアシスタントのソフィー・ウェルシュ氏 (Sophie Welsh) の尽力によって、これらすべての講義資料を電子アーカイブ化しました。このアーカイブズは愛知大学とハーバード大学日米関係プログラムでオンラインで共有され、皆さんもエズラ・ヴォーゲルの講義資料を体験することができるようになる予定です。

これは私のお気に入りの写真です。教室でヴォーゲル先生が岩倉使節団について講義されていたことを今でも鮮明に覚えています。岩倉使節団とは、1871年に日本の明治政府が指導者や若者をアメリカ、ヨーロッパに2年間派遣したもので、上海にも立ち寄るなどして世界各国の政府、社会、経済の構築の方法を調査研究しました。

ヴォーゲル先生は常に小さなノートを携えておられました。そのノートの1997年9月24日の書き込みからわかるのですが、ヴォーゲル先生は岩倉使節団を日本が外の世界に出て学ぶための重要なステップであったと捉えておられます。ここには「文明開国」、すなわち文化の開放について記されています。岩倉使節団は企業だけを見たわけではありません。もちろん彼らは工場も見学しましたが、公教育がどのように構築されていたのかも観察しました。それは非常に重要なことでした。さらに彼らはブロードウェイやウィーン交響楽団の演奏会にも行きました。ヴォーゲル先生はそうしたことを通して岩倉使節団の人々が迷信や先入観を克服していったことが重要であると書き記しておられます。こうした過去の経験の意味を学生たちに教えることによって、現在の私たちが同じように迷信や先入観を克服することを促されたのでしょう。

Teacher

## Field Work: Analytical Observation

Foreign Cultures 26 Industrial East Asia  
 Lecture Outline for Sept. 16, 1996  
 Title: A Tour of East Asia Before and After Industrialization

1. Scenes from EV 1996 summer travels (every year to Asia)

Beijing:  
 Tremendous construction boom  
 Poor students arrive at upbeat Peking U (Sept. 7)  
 Some leading world thinkers assemble to consider regional role of strong China in 21st century  
 UNDP: Poverty alleviation (60 million), N Korea mission

Guangzhou: mastering traffic, construction boom: subway & tall buildings  
 1996-2000: raise quality & technology, slower growth  
 New taxi competition

China Summary: Starting breakthrough. Messy, huge gaps

Malaysia: Close to completing breakthrough  
 Factories: semiconductors, disc drives, Matsushita  
 Celebratory: Twin highest buildings in world  
 Successor generation: Anwar (intellectual, compassion)

Four Little Dragons: Basically made it, but new problems: democracy and its pains, pollution, ind'l competition

私たちが海外に行き、彼の地の制度を観察して取り入れられるものを学び、他方で異質な人々に対する私たち自身の迷信や先入観を克服するにはどうすればよいのでしょうか。ヴォーゲル先生はフィールドワークを重要視されており、それを教育に取り入れておられました。例えば、1996年の講義の冒頭では、その年に広州を訪れた際のエピソードを語られておられます。タクシー運転手たちの競争や高層ビルの建設ラッシュに気づいたことや、さらに中国の成長は軌道に乗り始めているが、まだいくつかの問題があるとも語られておられます。実際に現地に行って観察し、それを教室に持ち帰り、また自分の研究に組み込むことこそヴォーゲル先生のやり方でした。私たちも、皆、現地に行って人々に会い、観察し、分析してどのように学んでいくのかを考えるべきです。

### 「ハーバード大学日米関係プログラム」初代所長

ヴォーゲル先生はあらゆるレベルでの交流を本当に重要視されておられたと思います。ですから、岩倉使節団の指導者たちの交流についても研究されたのです。ご著書の『日中関係史』の中でも、日本と中国の間の行き来について多くの出来事が取り上げられています。ヴォーゲル先生は、国際交流を研究成果や情報を共有する機会として、またご自分の指導力を高める機会としても非常に重要であると確信されておられました。なぜならば、海外に行けば、その国々がなぜ異なる手法を採っているのかということについて解説することを求められるからです。そうしながら他の国や地域を研究されておられました。「ハーバード大学日米関係プログラム」において、先生が指導的な役割を果たした理由の一つはここにあります。1980年、このプログラムが設立されるとヴォーゲル先生は初代所長に就任しました。

このプログラムはサミュエル・ハンティントン (Samuel Huntington) と小和田恆 (ひさし) によって始められましたが、本当の意味で実現させたのはヴォーゲル先生ご自身とそのネットワーキング能力でした。これは日本の大蔵省 (2001年より財務省) や外務省、通商産業省 (2001年より経済産業省) の官僚たちがハーバード大学に来て1年間過ごし、再び学生として学ぶというものです。いわば現代版の岩倉使節団です。また、ハーバード大学に1年間留学するのは官僚だけではなく、ジャーナリストもいます。なぜならば、私たちは双方の視点を理解したうえで国際的な出来事を報道しうるジャーナリストを求めているからです。さらに、このプログラムは学位を取得したばかりの若いポストドクたちも受け入れています。

私は、このホールにいる皆さんの中からハーバード大学に1年間留学する方が出てくることを願っています。なぜならば、私たちは官僚やジャーナリスト、企業経営者などさまざまな人々が集まって学び合い、質問し合い、議論を共有するという使命の一端を担っているからです。



### 自宅から始まった「ヴォーゲル塾」

そうした国際交流はシャーロット・アイケルズ氏が写真を交えて紹介してくれた「ヴォーゲル塾」のビジョンの一部です。私は5年前の2018年にハーバード大学に教授として戻ってきたのですが、着任して間もない2019年の秋ごろだったと記憶していますが、ヴォーゲル先生がやってきてヴォーゲル塾を引き継ぐことを考えてくれないかとおっしゃいました。ご自宅での塾の運営に困難を感じ始めておられたのです。そして12月のセッションに参加しないかとお誘いくださったのですが、私は台湾での用事がありましたので、「次回には行かせていただきます」と返事をしました。

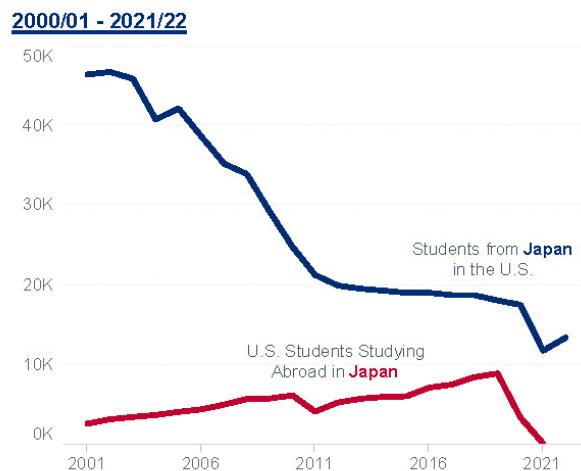
しかし、その後の新型コロナウイルス感染症のまん延によって、結局、私は参加することができませんでした。ですから、シャーロット・アイケルズ氏によるヴォーゲル塾の紹介を拝見することができて本当にうれしかったです。

先生がお亡くなりになった後、ヴォーゲル塾の幹事長である三浦弘孝氏が私と日米関係プログラム副所長の藤平新樹氏を訪ねてきて、オンラインで続けられないかと言ってきました。こうしてヴォーゲル塾は、ヴォーゲル先生のリビングルームでのピザと寿司を食べながらという形式ではなく、ボストンに来た日本の学生たちがオンライン上で自分たちのアイデアを発表し、交換し、そして発展させるという新しい形になりました。

そういうわけで現在のところ、私たちはオンライン形式で行っているのですが、今年中には対面式に戻すつもりです。しかし、私たちは全員が連絡を取り合い、アイデアを共有し、自分の意見を発展させるというヴォーゲル塾の伝統を続けていきたいと考えています。そして、皆さんにも、学びや研究、将来の仕事面において、その一員となる道が開けています。

Teacher

## Declining Number of Japanese Going Abroad



Source: The Open Doors Report on International Educational Exchange

述べてきたように国際交流を極めて重視された先生にとって、外の世界に出ようとする日本人が減っていることは懸念すべきことだったに違いありません。アメリカに留学する日本人学生は減少傾向にあります。そのかわりに韓国やヨーロッパに留学する日本人学生が増えていけば、それはそれで良いことなのでしょうが、実際にはアメリカ以外への留学も減少傾向にあります。このように日本人の海外留学が減少していることには、人口そのものの減少という問題もあるのですが、それでも私たちにとってこれは大きな課題なのです。

### 外交官として

私たちは、外の世界に目を向け、他の人から学ぶという精神をどのように継続できるかを考えていかなければなりません。それは、ヴォーゲル先生の国際主義の遺産を継承していく方法として非常に重要なことだと思います。ヴォーゲル先生は社会学の教授でありながら、国際関係に関わる課題に大変熱心に取り組んでおられました。ヴォーゲル先生は世界の問題について語る公共知識人だったのです。一方で、1993年にはアメリカ合衆国国家情報会議 (NIC: National Intelligence Council) のメンバーに就任されています。しかし、NICでの2年間だけでなく、ヴォーゲル先生は常に外交官のような公的な役割を果たされていたと思います。

ヴォーゲル先生は、日本の中枢と関係を築き、中国においても尊敬を集める人物でした。その卓越した立場にあって両国の首脳たちと対話をしたのです。そうしたヴォーゲル先生と首脳たちとの会談が、両国の相互交流を導いていたことを私たちは知っています。ヴォーゲル先生は、自分は日本の友人であり、また中国の友人でもあるから他の人が言えないことも言えるのだ、とよくおっしゃっていました。

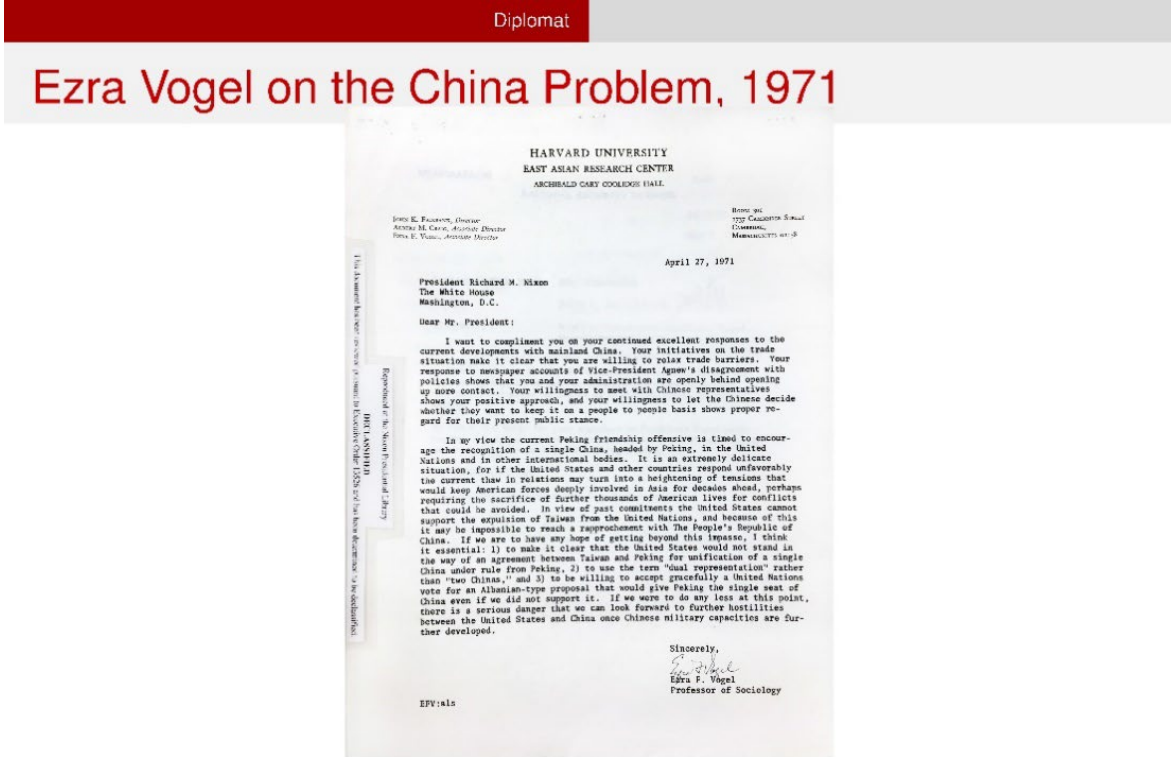
例えば、ハーバード大学で日本のビジネスマンを招いて北朝鮮危機について議論した際、ヴォーゲル先生、ジョセフ・ナイ (Joseph Nye)、そして私は核兵器の危険性について話をしたのですが、何人かの人が北朝鮮による拉致問題について話し始めがありました。するとヴォーゲル先生は今日議論すべきはその問題ではないとおっしゃいました。このときは核危機の脅威に焦点を絞る必要があったのです。ヴォーゲル先生は友人たちとの会話にあっても方向性を正すことができる方でした。

### 「ヴォーゲル・レター」：ニクソン大統領への書簡

そのような姿勢でヴォーゲル先生は中国の指導者たちと対話し、歴史問題や日本との論争についてもっとオープンな意見交換をするように働きかけていました。もちろん、その外交活動には長い歴史があるのですが、ここではヴォーゲル先生の外交官的な活動の第一歩についてお話しておきたいと思います。本当に注目に値することです。これは李春利教授が編集した本の中でも取り上げられているもので、1971年にヴォーゲル先生が中国問題に関してニクソン大統領に宛てた驚くべき書簡に関することです (李春利編著『不確実



性の世界と現代中国』日本評論社、2022年)。この書簡は加藤嘉一氏がニクソン大統領図書館で見いだしました。



● Letter provided courtesy of Yoshikazu Kato

Christina Davis (Harvard)      Vogel Lessons      July 1, 2023      10/15

共産主義革命によって北京を首都とする中華人民共和国が成立しても、アメリカと西側諸国は台湾に移った中華民国政府を一つの中国として国連で承認していました。つまり、国連において中国を代表するのは台湾の中華民国であり、大陸の中華人民共和国は除外されたのです。しかし、この状況をどう変えていくのかということについての交渉がピークに達した1970年代、(当時はまだ世界的に有名な教授ではなかった) ヴォーゲル先生はニクソン大統領に手紙を認め、オープンな対話が始まったことを確認した上で、三つの提案を検討してほしいと述べたのです。

一つは、アメリカが、中国の統一に向けた台湾側と北京側との合意、すなわち一つの中国という政策を妨げないという立場を明確にすること。

二つ目は、「二つの中国」ではなく「二重代表」という表現を用いること。これは一つの中国という信念を持ちながら二つの人口を代表する二つの政府を認めるということです。今日、双方が代表を出しているアジア開発銀行、世界貿易機関、アジア太平洋経済協力会議 (APEC) において、このことはうまく機能しています。1971年に記された「二重代表」という言葉は、今日においても続いていく可能性があるものなのです。

三つ目は、ニクソン大統領に対して、たとえわれわれが支持しないとしても、北京側に中国を代表する単独の議席を与える国連の議決を潔く受け入れるべきだということ。

常に勝てるわけではないということを認識することこそ、究極の外交といえるのではないのでしょうか。

では、アメリカは国連における中国の代表権について最終的にどのように臨んだのでしょうか。アメリカは拒否権を行使することもできましたが、結局、拒否権を行使しないことを選択しました。中華人民共和国が国連において中国を代表することを認めたのです。

今日、私たちが多くの困難な問題に対処する中で、1971年にヴォーゲル先生が行ったこの外交スタイルは重要な教訓を含んでいます。私は *Discriminatory Clubs: The Geopolitics of International Organizations* (『差別的なクラブ：国際組織の地政学』〔仮訳〕、Princeton University Press、2023年) という本を執筆し、国際組織がいかに友好国、志を同じくする国のクラブになっているかについて考察しました。しかし、そうした同盟関係を超越して国際機関やその他の場を利用しつつ、各国、各地域が同じテーブルについて意見を交換する必要があるのだと思います。

### 「綱渡り」の中国政策

今日、中国に関する問題を検討することは非常に難しいものがあります。先月のアンソニー・ブリンケン (Antony J. Blinken) 米 국무長官の北京訪問ではレッドカーペットが敷かれませんでした。アメリカや日本の産業界では自分たちの技術が中国に盗まれていると考えられており、また中国の経済政策に対する批判もあります。さらに、新疆ウイグル自治区の人権状況への批判もあります。そうした最中での外交というのは綱渡りというべきもので、それでもブリンケンは手を差し伸べて、「われわれは協力したい」と言わざるをえませんでした。そして、双方は協力のために手を差し伸べ合いつつも、それぞれの国民に譲歩しすぎていると批判されないように注意しているのです。

そして、このような状況は貿易の減速をもたらし、多くの関税による貿易戦争となっています。アメリカの最高水準の技術が中国に渡るのを阻止するための輸出規制があるため、日本企業は中国との間でどの商品が取引できるのか、あるいは取引できないのかを判断することに苦勞しています。

こうした困難な時期においては、自国の国益と価値観を堅持するだけでなく、同時に相手側の視点をも理解する長期的視野を持った指導力が必要です。しかし、それは難しいことです。現在、一般の人々は中国に対して否定的です。興味深いことに、日本は中国に対して最も否定的な態度を持っています。国別の中国に対する否定的な世論のランキングでは、日本がトップで、アメリカとヨーロッパ諸国が僅差で続いているのです。

### エズラ・ヴォーゲルの遺産

現在、中国が私たちの利益に敵対する権威主義的な支配の方向に向かっていると多くの人が感じているようです。この敵意を、私たちはどのように克服すればよいのでしょうか。状況は悪化しています。日本の世論を見ると、中国を好意的に見ている人はこの10年間で

大幅に減少しました。このことについて、ヴォーゲル先生も大きな懸念を抱いておられました。

人々が相手国を敵対視するような状況を止めるにはどうすればよいのでしょうか。外国人を野蛮人と見なすような時代に戻ってしまうのでしょうか。かつて、明治政府の指導者たちは、以前は野蛮だとしていた欧米諸国の社会の制度を取り入れようと彼らに学ぼうとし、それを欧米諸国が迎え入れたことがありました。部外者や異質な者に対する敵意を克服する方法は交流と外交なのだと考えます。

今年の春、日本の岸田文雄首相は広島で G7 サミットを開催しました。日本はアメリカ、ヨーロッパといった価値観を共有する民主主義国家からなる西側諸国の同盟の中核という特別な位置に立っているのです。ここで重要なのは、現状では難しい課題なのですが、日本が中国との良好な関係を維持していくということです。取引することができる商品を確認しながら貿易を遮断することなく継続し、首脳会談を行って対話し続けていくべきなのです。

昨日、私は岐阜の長良川へ鵜飼を観覧しに行きました。これは千年以上も続いてきた伝統的な漁です。鵜匠が船上でバランスを取りながらひもを結わいた鵜を操る様子を見て、これはまるで外交のようだと私は思いました。社会においては企業や国民、政治家たちが右往左往しながら、さまざまな仕事に取り組みますが、それは調整されなければなりません。彼らを前進させたり、あるいは前進しすぎないようにもしたりすることによって、皆が一緒に発展することができるようになるのです。それはまるで鵜匠が微妙なバランスを取りながら多くのアユを捕るかのようです。

鵜匠が7羽の鵜を自在に操る鵜飼のように、私たちの指導者が外交を進めれば、さまざま問題について解決策を話し合っていくことができるはずです。そして、そうしたときにヴォーゲル先生が私たちに教えてくれたことを思い出してほしいのです。それは他者から教えられることを受け入れる寛容さを持ちながら、双方の社会の比較を通して学ぶということです。私たちは現地の知識を学ぶべきなのであり、それは他国を訪れて国際交流を実体験し、さらに対話することによって初めて可能となるものです。

本日は、皆さんにお話しをする機会を与えていただきまして、本当にありがとうございました。大変光栄に思っております。そして、この後の対話を楽しみにしております。

(監訳：李春利、校正：石田卓生)